

## 「豊川海軍工廠空襲目撃図」の由来について

この絵は、豊川海軍工廠の手記集刊行に尽力された粟生博氏（元 機銃部工員）より桜ヶ丘ミュージアムに寄贈されたものです。この絵の由来について、『被爆40周年記念 嗚呼豊川海軍工廠』（昭和60年発行）に以下のように記されています。

私は昨年蒲郡の三谷にお住いの藤田後雄氏から、一通の手紙を受け取った。その内容は「先日私は中日新聞で文集嗚呼豊川海軍工廠のことを知りました。私は工廠には直接関係のない者ですが、当時工廠へ通っていた渡辺毅氏が工廠爆撃とそれに続く終戦により徴用解除となり故郷の静岡へ帰られる時にこの目撃図を私に託して行かれ、三十八年間そのままになっていましたが、貴殿の発行されている文集のことを知り、何かお役に立てばと存じ同封しました。ご不用なら処分して下さい結構です」というものでした。私は同封された一枚の絵を見た時、稲妻に全身を打たれたかと思うほどの驚き、そしてあの時まのあたりにした凄惨な地獄の様とこの絵が一つに重なり、しばし息をするのさえ忘れたほどでした。素人の絵とは申せ、この絵には目撃した者でなければ到底描くことのできない真実があります。地獄の鬼神が渡辺氏をして描かせたずっしりと迫るものがあります。また、その地獄に遭遇した私には当時のすべてがこの一枚の絵に凝縮されたように思えてなりません。広島に「原爆の図」があるなら、豊川に「爆撃の図」とありと世に問い、戦争の恐ろしさを命ある限り伝えたい。

### 渡辺毅氏談

八月七日午後四時頃、空襲後の混乱の中を当時夜勤明けで近辺の空襲で危く助かった家を出ました。いろいろ悲惨な光景を見ながら、道を一生懸命に正門の方へ駆けて職場を目指しました。職場の第一機銃工場に生き残りの仲間達と会うと直ぐ私はみんなに飲み水を選んでくれる様たのまれ、幸いに工廠前の民家の井戸が大丈夫との事、バケツ二つに水を入れて正門の通路まで運びました。その前後の事は戦場の痛ましさに只呆然とするばかりでした。図の中の戸板に一人のせて出て来たのを見ると首のない人でした。丁重な取扱いから多分身分の高い人のものと感じました。皆が私のバケツの水を見ると「水をくれ、水をくれ」と必死に叫ぶので、近づいて一人一人にヒシヤクで飲ませてあげました。とても喜ばれ、このことは私の一生を通じて忘れることができません。

図は粗雑ですが、当時は死者を目前にしてスケッチなど不謹慎極まりないと思う反面、今だれかが書き残しておかなければと思う心の葛藤で悩みました。あの時の絵が今も残っていようとは……